

# 藤布ふじふのふるさと 京都府京丹後へ



藤蔓を持つ小石原将夫さん(左)と藤布の帯を締めた私

幻の原始布にかける真摯な思い

木綿到来以前の日本では、樹木や草などの植物から繊維を取り出し、原始的な機で織り上げ、衣服や生活用具を作ってきました。「藤布」はその原始布を代表する織物です。古く『万葉集』には「大君の塩焼く海人の藤衣」などと記されています。現代では幻の布と思われていましたが、織物の街、京都府京丹后市網野町で今も伝承されているのです。

その中心人物は小石原将夫さん。小石原さんは丹後の地で家業の織物業に励んでいた昭和五十五年、NHKのテレビ番組で、途絶えたと思っていた藤織の技術が丹後に残っていることを知りました。それは丹後半島の山間部・宮津市上世屋。伝承していたのは光野タメさんや小川ツヤさんら数名で、みんな七十、八十代の大ベテランでした。小石原さんはすぐに藤織の技術

を教わりに日参しました。それから三十五年。技術の伝承と普及を目的に「丹後藤織り保存会」が発足し、その後京都府の無形民俗文化財の指定を受けました。さらに地域の活性化を目指す「丹後藤布振興会」も立ち上がり、京都府の伝統工芸品の指定も受け、両者の活動で技術保存の道が開かれるまでになりました。小石原さんは山で藤蔓を伐り出し、天地が分かるように印を付けます。蔓を木槌でたたき、樹皮を取り除いて中皮(アラソ)を取る「藤剥ぎ」の作業をしやす

くします。それを四、五時間「灰汁炊きあくくだ」して、木灰の強いアルカリでアラソの木質部を溶かします。その後清流で不純物を洗い流すと白い繊維が現れます。米ぬかを溶いた湯にそのアラソを入れて干すと滑らかになり、奥さまの朱美さんが「藤績ふじぬみ」をします。そして甘く撚りをかけて手機で織ります。藤布ができるまでには、大変な作業の積み重ねがあると驚きの連続でしたが、小石原さんのご子息・充保さんが後継者として日々研鑽を積んでおられ、頼もしく思いました。



木灰を摺り込んだアラソを大釜で煮る「灰汁炊き」の作業



近くの新庄川でアラソを洗い、竹製の「コウバシ」でしごきます



経糸を200~300本張り、水で濡らした緯糸を織り入れます